



色
 集
 集

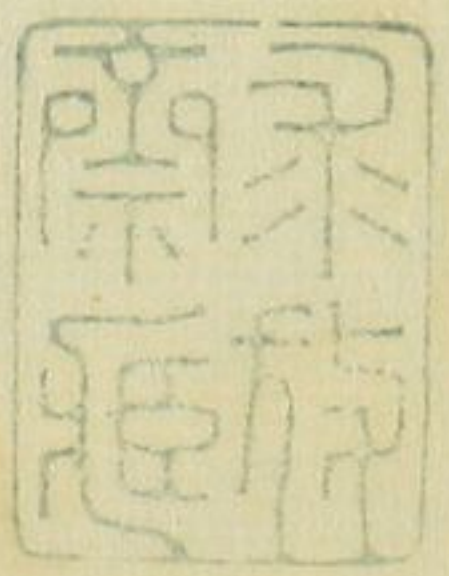
 四

中村俊定文庫
 文庫 18
 713
 4





之孫三年秋



唐汁とけれ糸やまはりきりくす
あやうきりて 青穂す。秋
秋をまゐるく。月けん
な〜て〜り〜 十の意
子代強くきものを振ほりて
雪の喜ふたひ〜喜〜うれ

元兆
とせ成
望水
吉来
舟
兆

雪の喜

宗おしと統よあまゝるよその約
ノ耶、さきひかゝるのうた
夕飯小、重厚さくハ風を
堀の口はをりこしてき味よ
このらゝいさかゝはれて体
途世強しよ、あふりの
重強と人よあまのあ
あつれき好の、育くのり
町内の杖もあけはし
何とくもはもあふり

水 来 北 菊 来 水 菊 北 水 来

苑とあまハ、西念、秋
あまの、破きんよも
あまのあれよあまの
旅の化をよ、あまの
すあま、さ女のあまの
何れいよ、旅の
夕月夜、あまの
人よ、あまの

北 菊 来 水 菊 北 水 来

白

うそつゝくたり情いそそそ好むむ
まゝもたふの報とれ物す
境より田のまやよていけきよ地
加茂の江ハよきやうなり
物よりれ尻をうく名のり於
るのやうりのまき 迷
登新しるも道の分れまはよ
まゝらくくまは菊のまよくじ
糸あつゝ後一ふいふ嘆ふなり
まも、う月あけののくち

水 来 北 菊 水 来 菊 北 来 水

情地の望をうく。西日くれ
潮落くふ 芦の穂のう
舟の分れ鐘を鳴るまきまき
香まゝとらるる 石原のあ
入月不為格ひる。武者ひら
葉れ免く筆とわやとれ
山るは昼も狐のあつゝて
とれとひ来やと 酒造りし

治若 香成 霧沾 若 若 沾 若 若 若

夕の風ありてに居る。鞠の音
しるふことよの垣をぬひて
跡緒を 標の柱にすゝめて
うさねー髪と 巻はらん
細くあきつゝこれ 敷きもみ
何れも 焼火よ 皆つゝ
梅の月影の 意は倍瘦く
浪つゝうめゝの 簾ひ
今くはくれ 己の 砧や 鳴わん
四半 花も 風も 身も

沾 荷 存 沾 荷 存 沾 荷 存

雪あゝに 鳩ふき 水は 綿糸
山一 わくく 目とく 木の 葉
この 月や 先 知を ことす 露
浪の 多ぬ 人も あり ちき
木と 換く 枕の 柱と んん
此を の さくれ ち 此 千
かの つゝ 遠の ねと ちん
造る ちや たり 正 武士

不 知 荊 口 七 世 成 女 仍 左 柳 跡 言 斜 炭 如 風

寂寞とよむ人ふふ 葉節を
 るのそらに 暮も 改新をね
 一むしうらなれて 秋の市のみ
 遠くの子の 食つむ たり
 用とあし くるるわあし 皆
 新しと 培れて 別よいつ
 月のおお かく 志ひさる 小巻の言
 栞換る 中 書はく の々
 位らる 髪も 若色よ 秋とれ
 大玉の 換と 新る 延ま
 白 白 白 白 白 白 白 白

とつ 積葉や くられさしり
 ハッ さしり 其の 頃さ
 丁海 白根ふ 其の 廣く
 うら 委る けす 心 纏まき
 若人の 髪は かく けし
 その しく 志や さい 下し のる
 蘇の くに 若も けれ ね 意と
 る 若さ かく みる あり 月の うち
 朔の 急は けく たる 雲 冥 雲
 くる 文 並 する 延も 延ま
 白 白 白 白 白 白 白 白

昔と云仁は樂のまじきの風さく
 酒の海か 小のまき月
 言はぬのまじきたは 一や中
 何れも鳴る 月もまじき
 むねのまじきの何のまじき
 小まきらくく 中いさく ながさ
 うはまのまじき 鳴る 白のまじき
 らくまき 鳴る 身のまじき
 まあけて 花を入る 新のまじき
 まりけ 鳴る いろく のまじき
 白、 白、 白、 白、 白、 白

半のまじき 鳴る 白のまじき
 下極のまじき 鳴る 白のまじき
 酒のまじき 鳴る 白のまじき
 ああまにまじき 鳴る 白のまじき
 其外にまじき 鳴る 白のまじき
 まのまじき 鳴る 白のまじき
 史邦 史邦 史邦 史邦 史邦 史邦

爰摺しよる新しきけり連て
 折りの楽を物むたしと此
 体白しらこりあるひの歌をさく
 漢とむそのまじりいよとさ
 なまいさるうおれとすうと
 いつもあがりん難のしと枝
 秋たらし又一まきりなまい汁
 うれ歌甲く借来の月
 分利の外とさるる年の歌
 極まはるはてうまをけりけり

正秀
 看 通 邦 竹 来 香 香 通

爰可にきく終はちぬむのま
 ちけ終るくさうさうとさ
 人々るる者徳のまはえさる
 香月さともうまおもさけ
 うさるると過并に流るはる
 拍くまの帰るまねく
 硝子にるる流えやうさう酒
 たらさるあまいむくはる
 まじりに終はるる川神僧
 明石の如の大鼓うらとけ

邦 州 来 香 香 通 邦 州 来

香房よりねより舞よまはまき
乞食かこしと地くませり家
際のりてハ、りたふ おらりり
葉をとりむころやいとくまなる
夕るのすも照鏡みやりりり
子と巻つても 鞆のさーい
侍のかりまへふくまいのらえ
そろえんおまよ 木の 母とあ
洞 けは月まをまの光しそ
はるる葉と 横てわらまよ

親生 為郎 枝 小 枝 杖 親 杖 市

物象も程の糸やうまむむ
帯とまうけて まる 了 遊
棊よりたれ小房と 路い
ゆむむ——うつにほくま
まのほくま 遊杖橋の人たち
うさちこりに 極一とまき
一棊ふくましてあむとりの月
旅の——母かく糸眉のい
家さうらつと油のやき
まよまきまきまきまき

無 中 杖 枝 市 鼓 生 卜

わすれぬ店そのふのれとをせに
とそとよりけり沙汰の板しき
双院よりもおれりしき
亥時のまの仕るこゆりし
雲明てまのうほいさるれり
あささまくの夜のきつりし
大つこいおるまをくつと
店よりしゆる所のしき
風のふく鼓をさして清し
あ流ともいふまんまのし

視 孫 枝 良 鼓 親 孫 益 孫 卜

あふやの年のまともおし
ひけのまよげに罪やわらん
まゝらまのまのまをかま
花よくとくしてあつて
雪のうらも節よよはあり
うらまのやらまの江の山

市 鼓 益 親 良 枝

栞たてて白形しけり今
赤のまよの響業つく
葉の中へ葉のうほのま

春 暮

幾片も停る古の音に歌の心
 砂きりり 糸その糸と
 松とわくわくは思ひ子の心と
 いつゝ之屋ののちるを風
 残るやうゆきあうね暖の心
 くらりとくらりとほらよの月
 照、 越人

元禄己亥未秋

やま〜と歌してはよよ月のこと
 糸と〜してはよよ海は 糸
 切〜りあて 暖もあつぬ暮の心と
 踏〜きけりる 糸とので流〜き
 くら〜と流〜れは 暮るがの心と
 城〜とまりは 糸あまの心

と世成
 出秀
 治通
 文学
 水然
 物隆

糸りのたも別る湖のこころ能
 石の香居のちをくまじ
 鴻雁の姿と見分けきそひは
 りけり作色しりひりりりり
 梅も木にゆきふ傍のしらべは
 涙と隔る 岩の大井
 月けにさしをさるうはの上
 たくらしくとおおしく下り
 柳こもさ 猶も秋とくらうし
 髪のと 髪とを影えをさり

正則
 江
 緒
 華
 免
 正
 別
 重
 年
 五
 五
 五

糸りのたも別る湖のこころ能
 石の香居のちをくまじ
 鴻雁の姿と見分けきそひは
 りけり作色しりひりりりり
 梅も木にゆきふ傍のしらべは
 涙と隔る 岩の大井
 月けにさしをさるうはの上
 たくらしくとおおしく下り
 柳こもさ 猶も秋とくらうし
 髪のと 髪とを影えをさり

子
 別
 暗
 正
 華
 江
 茶
 香
 然
 秀
 通

塔くハ古き歌のあれのさう
 月をと 尚ふ やうと 旅 たる
 煙 凡に 烟の 岩やう 石のま
 繁ひる 橋の ゆふへ へりき
 うこまゝ 子いおり けさた 控所し
 舟 ぼろき た刀の 友さきま
 昔 椽小 船の かつき くらたき
 けしき さいに 唱て 香ハ 明きたり
 穢 人の 志れ わらへる 花のけ
 菊 かりて けめく びりく と 此
 業業 字 吟 魚 秀 沈 友 通 睡 吟 香

ありしを かくも けり 高のま
 こゝろ ことき 音 舟 の 舟 由
 新 島と とも の けり の まき 出く
 まらう けり こと 心の さき なら
 酒 の どの 瘴に 障ま とも けり
 けり とも とも とも とも とも

香 行 越 人 文 香 強 通 左 柳 香 氏

その〜 接ぐ戦とすめたり
〜と〜してふゆかりのね
二人めのつるにやとけね〜む
たつ〜とに糖を〜い〜
急角〜と突する産をの〜れ本
去世の〜ちの虫と〜い 接
飽を〜〜流も〜い〜
歯やけと〜れハ貝も〜れ
月を〜〜中焙て〜る〜なり
わ〜と〜ら〜 表の〜

刑口
は籠
木因
所香
常良
斜炭
柳
箱
も
口

一持ふあつる山の〜れ候〜
〜は〜す〜い〜い〜の〜ら〜ら〜
万葉の〜す〜い〜い〜い〜
村〜つ〜れ〜す〜て 大ぶら〜
岫〜すり〜柿の〜るの〜り〜
二代 玉子の醫ハ なが〜ら〜
揚らのた〜と〜る〜
名原〜〜ら〜ね とも〜す〜て
冬〜り〜り 物〜〜の〜大〜
茶のた〜て〜る〜も〜

五人
因
岩
箱
香
良
行
柳
も

五巻五

五

更〜〜は生れおとのうらを
 尾よあ〜〜の 音のきわく
 月〜〜にを〜〜や〜〜
 菖と〜〜り〜〜 ニ〜〜の〜〜
 何〜〜も〜〜を 結んで 陸に〜〜
 述〜〜つ〜〜は〜〜さ〜〜よ 集〜〜
 九條に控えて 中〜〜き〜〜
 為の〜〜け 志〜〜 母のた〜〜
 是の〜〜け 終會 ぬのま〜〜
 うめ 山〜〜さ〜〜 ぬふ〜〜
 人 通 翁 口 菖 良 香 因 行 灰

酒〜〜き 橋の屋あ〜〜の朝の乳
 丁も〜〜れも 湯池のあ
 去〜〜世の内より 枯〜〜ら〜〜
 ら〜〜そ〜〜くのや〜〜と〜〜い〜〜夕月
 たの〜〜けて 浪音の音あ〜〜ら〜〜
 す〜〜〜 乳〜〜〜 け〜〜の〜〜
 法 五 昌 房 ぐ 世 成 正 秀 聖 任 乙 お

罪を以て命別はる。胸にまき
 月ハ 多きこと如く懐く
 わさつとささと秋とハ空つと
 車馬をよ入 泪のさし大
 田の中になくも能のそら
 吾辰のれのみ 又わつた
 由縁より常もふ日中に統の
 夜まはしむく 月ひのほろひ
 月ひに二階の影をつさあけて
 そくの白いのじきさ ときつと

昼好 珠砂 盤子 甲糸 探志 遊刀 秀 色 好 糸

けろく 平海ものこれのちりや
 糸のさしむく 月ひのほろひ
 むらさきのさくらさくらおあひ
 是腐よした わけてさき
 うらやうの美月を海にそよむ
 とこれと持し えのすさえ
 うらやうのさくらさくらおあひ
 夕のちりさ 月の色也
 くれの香る夜の影をくら
 今を 月のさきと鳴しけむ

刀 子 秀 色 好 糸

弓と矢もささるるにそられ
 一と發所一と出れ
 杜宇の音もささるるにそられ
 文の字もささるるにそられ
 押したる海もささるるにそられ
 子履もささるるにそられ
 肉もささるるにそられ
 つと先のお入もささるるにそられ

石 好 色 房 子 石 徑

月代をいろくやせ村一花
 小松のうらうらふき山
 と一花叢の遠るく居りて
 あま一うらふき川
 酒ささるるにそられ
 襦と一うらふき

千川 石 好 色 房 子 石 徑

物とく 驚む 白あり 五月 日
りりき 二つ 一 菊の 玉れ
笠とれ 八 おも ゆる じり け
る とも 息よ い けむ 大 ぬ
る 鏡ハ 手 せむ けく に ぬ けり
居 風 名 たり てる きの けり けり
あ とも けり けり けり けり けり
傷 せ や けり の わ けり けり けり
佇 夏 の 所 神 一 ぬ を 漕 入 入
一 ね の けり けり けり けり けり

花 川 水 動 老 柳 筋 花 川 花

こ けり けり けり けり けり けり
色 と むく 鴨 を の けり けり 板
を どの 中 の けり けり けり けり
は けり けり 本 履 けり けり けり
架 子の 枝 けり けり けり けり けり
を けり 色 けり けり けり けり けり
枯 風 一 架 けり けり けり けり けり
お けり けり けり けり けり けり

新 口 酒 老 七 花 左 柳 大 舟 千 川 花

六月の日は思ききし 柳の木
手板の入り 花かきやう
まはらうりつけして侍する侍も宗
筆の面の就のときも 山陰
花をのころもおとらぬ禊の法
たさくは夏のまをさうく秋
月代もさうさやのころれき
なつれむくてるの能く
直ハ今終よりとれぬをささ
るのくさの 論究

花 柳 籠 川 老 舟 川 箱 柳 老

川起は露の丁まや鈴の月
柳の葉もをぬく 焚つけ
つまに結程の美とさるし
磯山つけお 鳩の鳴 一し
身くまは松のつくれの屋あり
残よりさうくくさるの結

文学
史考
史邦
去来
中巻

人の今お時くハ泣きの白と
 と育も舟よりおこはる
 心あはし様のささめ枝つき
 とりりとう川す本音の大根
 くれ張る葉鏡にのびる
 こけくくくくくくくく
 花とつり男と女と人を見よ
 物の時ふもくゆわれの月
 樂笛ととりて今も風
 歩のまくくくくく

邦 存 考 丈 来 竜 存 邦 丈 考

ふさくを踏すくくくく
 うひきくくくくく
 水の音も狭さるるのこる音



酒入のちいさな破花をされく
 物のくくくくくくく
 嬌くくくくくくく
 結おとらうくくく
 川きりし相のさくくく
 葉もこの枝くくく

考 丈 来 竜 存 邦 丈 考 竜 来

りけ合よしてまゝくららたさ
はまよあつる 中一の門
夕月とこゝろをわくふ山の端よ
るのけらけの名ハわきとせり
垣石に海風のふれ霧 嘆く
かきのむつさの干場うれる
傘をむ 史も老のまほやれ
野一儿もーね 鉄の目
あふふと掃集てはゆりたり
河くららさそ ちのかけらふ

辰 邦 来 卷 考 丈 邦 海 卷 来

暮のねも 刷ぬと川ーくれ
引くまき 凡の木の葉 ぬる
段引の鈴うわき 川こえそ
たねふとせらぬ 藤をりの弓
ゆらぐ戸かき 遠くさ青の月
人よもくれと 名物の掣子

去来 辰辰 史邦 海 来

老翁一息様て及をきり
 之の切たる死ねん
 吾て小みぬ月の物居を
 湖水の静を比良のそら
 柴の戸やそも空けておとよむ
 布子よなまよふ風の夕ぐれ
 押合て移てハ又立ちり
 たらぬものまこまき
 一うまゝ鞆つとる
 花このちまふに本等り

北 邦 朱 翁 北 邦 翁 朱 邦 北

花や音と下よやく
 夕の月
 夕の月を飾る
 梅のけこ
 唐の心人をきり
 半の
 かりけの心
 乙の
 秋くはるす
 良の
 扇のうと
 風

園 風
 梅 翁
 半 翁
 乙 翁
 良 翁
 風 翁

去よあふ夢路の韻をけり帯に
神くくぬに ね壁、人の
るのうらふまてふれ、けりしをれ
おこせとわすれあふのけりけ
停留のくくよふれ、ねをけりけ
うくくのそを かくくくく
村人の帯の巻よ、くくくく
結はつ徒をたふとくく
送つおけくく、の海も耳くく
月も名所の やくくく

をを伐
木白
新
配刀
夏
風
芽
玉
砂
刀

妹くく、帯にねをのそい、く
あ、くく、く、く、のそを、く
夫く、の帯のねを、とね、けり
出、く、く、く、く、のそ
け、を、れ、く、く、く、く、
肩、よ、く、く、く、 け、の、け、り、
け、言、け、り、く、く、く、く、
け、く、く、く、の、け、り、
芽、れ、よ、く、く、く、の、わ、り、
く、く、く、く、く、の、け、り、

風
夏
芽
白
紅
風
夏
芽

浮船の美のよの勝とくくとも
 脊中ハきくくカ〜〜〜ちちち
 一〜〜〜腕の中をた〜〜〜れき
 手とひくえ〜〜〜火の〜〜
 歌よめと〜〜〜之を〜〜〜けけ
 ち〜〜〜や〜〜〜街〜〜〜 燈
 七夕よ〜〜〜と〜〜〜〜〜〜〜
 ち〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜月
 柿の木の枝もた〜〜〜に〜〜〜
 飛て〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

菊 麦 菊 風 沙 白 刀 刻 白 菊

修り名の延進ひさる 孝つらひ
 小斗の序〜〜と 色〜〜〜心
 鷹の爪あ〜〜〜さ〜〜〜あ〜〜
 ま〜〜ハ〜〜中 山の井〜〜
 乞食〜〜〜茶〜〜〜茶〜〜 蕪〜〜
 餅子〜〜〜迎〜〜〜こ〜〜〜ひ〜〜
 ち〜〜〜よ〜〜〜〜〜〜〜の〜〜〜
 行の〜〜〜の や〜〜〜さ〜〜
 以〜〜ハ火と焚〜〜〜 ち〜〜〜
 ち〜〜〜の〜〜〜〜〜〜〜と〜〜

白 爪 刀 菊 菊 風 沙 白 刻

川つらつらあめあめ
目の夢吹て
月のおと
夜うら／＼

芳 風 菘 刀

きくわ程々
しんぎつ
くまの
垣
うらつれて
山花
秋風
たし

斜 旅
女 行
と 彦
荆 口
文 香
水 菰
左 柳
如 風

かさねのさひやうきとささの縁
 念仏のきりのけいさくすまの
 利つとつめさき小袖わさめて
 とらさぶららの 意うわとけふ
 奥住居さきの表ハ戸のまきり
 米さきとけいしてゆひうり
 鮎おろけの美とさくらさひ
 涙う月のけいえておうさ
 くら花の糸ふもろとけいさ
 月利してさきとさくらさひ

行 所香 牛川 辰 口 辰 菰 言 有 柳

上沖良

中日の秋と友あやとささ
 高に七氏の けいさく
 くらさる 芦のうけ原花
 園のねさきとさくら
 なきさきとさくら
 秋さきとさくら

乙卯 京柳 去来 凡此 糸石 乙卯

矣入よき品類の品向あつて
里らりくくあつてふのさめと
けりりりて友よれりりりり
早加よあつて停のそ連
白川や軍屋のちとつて地
右もたも荆棘 けふとつり
從澤大やうれあつて新のま
播めいこの ちもつてり
とつてつてつてつてつて
皆つてつてつてつてつて

史邦
玄
石
名
米
地
地
名
石

子君人ふ名はえす。月とを乳
まの海辺ふ 細のそり焼
印。つて移りつてねえ大なる
る何らつてと 南つてつてつて
米葉とつてつてつてつてつて
日をつてつてつてつてつて
下つてつてつてつてつてつて
ねらつてつてつてつてつて
るあつてつてつてつてつて
葉の所とれ かつてつてつて

好
名
邦
地
米
地
米
地
邦
地

青くても宵へふりのとるく
 抱ておのゝ記 秋乃あけ秋
 昔れ月 樹乃らつそくそそく
 坊主くくくくくくくくくく
 松山の松ハフーの候くく
 焙煙の炭と下川舟

石 土 邦 北 石 米 小 枕 邦

元禄五年申秋

深川夜遊

青くても宵へふりのとるく
 抱ておのゝ記 秋乃あけ秋
 昔れ月 樹乃らつそくそそく
 坊主くくくくくくくくくく
 松山の松ハフーの候くく
 焙煙の炭と下川舟

土 酒 嵐 水 壺 蕉

後日此山をくまのこまの
 少くも樹んであつては
 然る小意のふらふらおせを
 繋ぎつゝくまのこまの社
 寒徹の山を麓れ中より
 正なる風の吹くは
 目乃とくまのこまのこまの
 きゆるとくまのこまのこまの
 後日此山をくまのこまの
 那智の滝一山のまを

水 葉 葉 水 葉 水 葉 水 葉 水 葉

弓娘 下りきり
 荷とりたる士の海一花こむ
 町中の香辰は赤くきりん
 吹もーとくまのこまの
 草花はは地を踏みふ秋の
 伏見あつりのたもやの月
 玉あのおもをきけは嶺一
 山伏と切しけりる軍の
 よういおひのくまのこまの

水 葉 水 葉 水 葉 水 葉 水 葉 水 葉

对合ハ皆 上戸よての〜あり〜
 何〜と〜とあり〜れ〜と〜
 意也て和るハ孔よ〜わ〜と〜
 たて〜めて〜る〜ら〜の大目
 獲揚て〜田も〜る〜人の考
 む〜ろ〜と〜考〜と〜と〜けり
 ふ改に〜地〜の言の〜終市
 こと〜た〜と〜び〜ち〜るの 竈
 米と外 人〜考〜と〜れ〜と〜
 き〜のほ〜ら〜と〜ふ〜と〜ふ〜と〜

景 水 景 水 景 水 景 水

うると〜り〜 宗鑑と名

お美第一中米と外下戸ハ

〜の仁合あり〜

況是よあると名の〜と〜と〜れ
 縁 縁 善よ 善よ 善よの意
 鶴鶴何〜この縁をつ〜と〜と〜
 左〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
 月の多沙も 所〜小新〜り
 築地 のと〜と〜 典業の智

海 許 大 先 大 六 也

おまゝほむのふのちうん
 椀のふくろ 落し竹の子
 名前の名煮つろく居る
 むしおしお神居はする
 きねくハ育の踊の節と居て
 東 大直の舟うすとき
 青島の板より居の音
 うらりの柱杖はえうつく
 紫くけの挑灯を居物わ
 汐はくくふ早川の橋

茶 半 六 景 並 六 景 半 六 景 並

村はれ田つゝのまのまき
 塚のころんのもあるそと
 高を傍の師よ也合とるの末
 今ハ破れく 今川の歌
 梅折好撰の風とよと具
 又まねるくく 四玉ゆき
 新島よゆれ居るあゆの歌
 よらけくひひにくるまの歌
 ときと居居つゝ 井戸の居
 月夜と居とあふくく

六 半 景 並 六 景 半 六 景 並

さとりしそ旅あてふ子をも
えつとけりしとけりし物
うつすことつのもちあつて
る親きに 幸満をふら
くくやるとくぬ減とあつた
きりの結ぶ流もかくら
る垣よ木やりすの端のくら
日も 赤くある 下り部も
ころふふ停智の絶のとけりあて
泊様よ、やくま川よのよ

意 景 六 堂 意 景 堂 六 景 意

口切小唄れ遊うかつし身
筆々しき 葛のさつし
山荘のまふゆふき草もけり
物の望るの みるくの歌
旅人乃とけり六月のゆき
大戸をあけてとる深月

七世 支梁 光景 利合 酒巻 袋水

雑のちりこれ粒を産るうら
わうはま橋をさし初るうり
めらまらん六田の柳行り植て
魚菜をめくくお夏乃け
ゆるる雨りしし行り標の羽
種うたふれ 室坊を極
とくくと跡おししなるの上
海ても食の菜やひきり月
新雲のま門の虫を旅さく
癒ふ朽たむじ一うの法

相矣 也竹 梁 彦 合 水 梁 堂 景 水 堂 梁

為口入花多居の 万中康
首のうしと家のりえてほのかく
都をばさもれし御まじりた
見りしとくく 釈迦寺の元
笑うりてしあ使も積すり
香のちりし 枇杷のくはら
凡早して領とんき腕の高
下らげまをさるる社象町
日ありに編賣あうと夏ん
ふらりの房のきふ川口

川 矣 合 堂 景 水 堂 梁 彦 合 水 梁 堂 梁

白

水はきれ稿のーアくよ肩陰し
 ちえ 黄とくたる 門前の坂
 皮剥の物煮て 喰ふ膏の月
 上毛吹くーる厚りの響
 谷はくい流ーゆる作花
 たカりらとーりやいーらまふ
 物申もも 簾ーつたに焚くーま
 くらーくーる 丸茶の敷
 花市り 沖ー室の路の人 遊り
 まといふーの地ハ 珍なり

合 実 梁 茶 堂 竹 実 蕪 菜 合

霜ふ今行や水斗れほーのあ
 笛乃言く序るあつつきこの格
 一はくひ 鶴の来て 舞る杉あり
 かのくーくー 刈ー田向くはけ
 空の名をわくためむくれの月
 腕たーほくまふ 西窓のとももま

百葉子
 式之
 くせ成
 夏牛
 村鞍
 槐市

名取の麓の中の大いふ
 なる乃小祢直も高小下り
 抱枕をよせせしむ一清の言
 残衣羽織を中一あはとせ
 浦くを今よけ人よ又去て
 古き別後れ家をくはり
 宵明乃畑おく勝に陣ををせ
 米つろくあゝまよ山のあき
 手習ひのふゆを花よをせ
 瓶子よ添へくおひ——ういど

梅額
 牛
 之
 兼
 額
 市
 村
 意
 之

杖はよての居れは切ふのを
 えわ——に——つらぬらぬ
 まのよて揺く小前をあせたり
 紫糸巻の輝凡小曲くくま
 中しけたうら居たるるうた
 夜よるうらまをせ——
 うら——とわくはのまのらさなり
 ひ——うらまをせ——
 紫糸巻の輝凡小曲くくま
 中しけたうら居たるるうた
 夜よるうらまをせ——
 うら——とわくはのまのらさなり
 ひ——うらまをせ——

額
 果
 村
 額
 益
 牛
 之
 村
 市
 之

梅つるに舟さきしきくふ海しき
あけしけしきやま物の致
子けきつてしき家とあしき
ちきのしきよし下ハ 棟杭
狩むし下きのしきしきし
幕をしししきしきしき
雛のしきしきしきしき
細うししきしきしきしき
初春の射場やわんとらけて
籠ししきしきしきしき

村 築 市 之 意 顔 之 意 築 村



